

終結、達成をあらわす複合動詞の一考察
—「-トオス」、「-ツクス」、「-ハタス」を中心に—

田中 寛

A Study on Compound Verbs of Conclusion and
Accomplishment: Focusing on “-toosu”, “-tsukusu”, “-hata-su”

TANAKA Hiroshi

Abstract

There are several Japanese compound-verbs with meanings concerning the reaching or accomplishment of some act or state. The present paper, building on the result of Tanaka's (2016) study of *-kiru*, *-nuku*, extends the same analysis to *-toosu*, *-tsukusu*, and other compound-verbs with the meaning of successful execution. Apart from their aspect, these compound-verbs imply some resultant feeling on the part of the agent or of the narrator. I further consider the contextual co-occurrence of adverbs such as *kanzen-ni*, and expressions of potential or purpose.

Through attention to the frequency and context of use of these verbs, possible deficiencies in existing dictionary entries are explored, and the advantages of the present approach for language teaching are discussed.

1. はじめに

時間の局面、すなわち時態は観察者の視点によって多種多様な様相を呈す

るが、そのアスペクトの一範疇とされる「終結」という時態の局面においてもさまざまな環境、意志の介在が観察される。田中（2016）では従来のアスペクト研究を補完する意味から、心的姿勢に重点をおきつつ、主として「ヌク」「キル」をとりあげ、終結という局面に潜む余情性について試論した。すなわち、終結には達成の確認と同時に、遂行にまつわる何らかの感情の介在が認められた。次のような中継放送やインタビューに見られる例である。

(1) a. 一点を守り切りました。 (野球中継解説)

b. 明日も笑顔で終わり抜きたいです。 (勝利投手インタビュー)

とくに近年、「キル」については使用範囲が拡大し、中には次のような例も散見される。いわば書き手の行為主体者への感情移入といったものが滲み出ているように思われる¹⁾。

(2) 海老沼が本来の切れ味が戻ってきた。(略) 決勝もダワドルジ (モンゴル) の返し技に揺らぐことなく、内股で仕留め切った。

(朝日新聞 2016.2.8)

(2)のような例では臨場感を伝える際の、語りにウエイトをおいた表現といえよう。上記用例には「しオウル」「しテシマウ」のような単純終結相には見られない感情的な意味が認められる。「キル」については近年、比較的汎用性の高い用法が観察され、なお十分に考察していく必要があるが、本稿では「キル」「ヌク」以外の終結にまつわる複合動詞後項動詞のうち、「トオス」、「ツクス」、「ハタス」、「トゲル」、「アゲル」などの明確な意味記述を試みる。

2. 「トオス」の意味と機能

本動詞としての「トオス」には、「新聞に目を通す」、「針に糸を通す」、「国会で法案を通す」、「紫外線を通す」、「客を二階に通す」、「上着に袖を通す」、「部屋に風を通す」などのように二項動詞、つまりニ格、デ格との組み合わせで用いられる。「受付を通して」「壁を通して」「カーテンを通して」のような後置詞的な用法もある。本来の意味を残存させ、一方から一方にかけて直線的に通過する様相をあらわすのが本務と言える²⁾。

- (3) 改札口で彼等に別れて、冬の夜風が吹き通すプラットホームに立ちながら、電車を待っている間、私とナオミとはあんまり口を利きませんでした。（谷崎潤一郎『痴人の愛』）

本稿で扱う「終結」相の複合動詞後項動詞（以下、複合動詞）「-トオス」は「意見を通す、主張を通す」のようにどこまでも、徹底的にといった周到さを内包する。以下の用例では「最初から最後まで」、かつ「まんべんなく」といった意味をあらわしている。

- (4) 私には先刻懐へ入れた郵便物の中を開けて見ようという目的があった。それは病人の枕元でも容易に出来る所作には違なかった。然し書かれたものの分量があまりに多過ぎるので、一息にそこで読み通す訳には行かなかった。（夏目漱石『こころ』）
- (5) 文章は例えようもなく下手で、思考はいたるところで滞り、読みとおすのは容易ではなかったが、（三島由紀夫『金閣寺』）
- (6) 何の気なしにその本を開いた氏は、読んでいくうちに悩んでいるとおりの症状が記されていることに驚いた。一気に読みとおした大西さんは、その後二十冊ほどの森田療法に関する本を取り寄せ、次々に読んでいった。（『心の危機管理術』）

この「読みとおす」は「一息に」「一気に」という副詞成分が示唆するように、ある種の勢い、衝動といったものが行為者の姿勢に感じられる。その結果、さまざまな障害、抵抗を排除しながら、貫徹する意志の強さを明示する。出現頻度の高いものとして、「守り通す」「押し通す」「やり通す」などがある。

- (7) 今更仕方がないから、御前の好きなものを遣るより外に途はあるまいと、向うに云わせる積りもあったのでしょうか。とにかく大学へ入ってまでも養父母を欺むき通す気はなかったらしいのです。（夏目漱石『こころ』）
- (8) 一週間も寝込んだままの重病人を、それほどの危険をおかしてまで隠し通す価値はない。（安部公房『砂の女』）

- (9) この玄関の戸を守り通す望みはないと思ったので、私たちは各自の部屋へは行って内から鍵をかけました。

(平川祐弘『マテオリッチ伝』)

- (10) 駒子がいいなづけの約束を守り通したことも、身を落してまで療養させたことも、すべてこれ徒労でなくてなんであろう。

(川端康成『雪国』)

- (11) 「そんな製品はコストがかかりすぎますよ」などと色んな反対意見もあったが、「そこを何とかするのが君らの仕事だ」と強引に自説を押し通した。

(『心の危機管理術』)

- (12) しかし、夢のことなど、いちいち気にしていてもはじまらない。とにかく、始めたことを、やりとおすだけだ。(安部公房『砂の女』)

上例(7)「とにかく大学へ入ってまでも」、(8)「それほどの危険をおかしてまで」といった「までも」「まで」副詞句成分、さらに(11)「強引に」、(12)「とにかく」といった副詞成分に、行為者の姿勢がうかがわれる。用例を検討してみると、「通す」と結びつきやすい一定の動詞が観察される。意味的には一定の行為量がもとめられる動詞で、たとえば、「読む」は「小説を読む」にしても一頁から全体にいたるまでを内包し、「守る」「貫く」も「約束を守る」「遺言を守る」「意志を貫く」のように、一定時間の一貫した努力行為の継続を含意する。

一方、動詞の形態としては目的に附随する行為遂行に際して意志性が重視されることから、「と試みる」「とする」などが後接する例が見られた。

- (13) 私は咄嗟の間に、私の知らなければならない事を知ろうとして、ちらちらする文字を、眼で刺し通そうと試みた。(夏目漱石『こころ』)

- (14) 何人かの友だちと遊ぼうとして、思いのままに、勝手にふるまおうとすると、かならず誰かから妨げられ、それでも自分を押し通そうとすると、次の機会から、仲間に入れてもらえなくなるのだと知ります。

(『一人っ子の上手な育て方』)

上例(13)、(14)のように、前節には「ようとして」に導かれる目的行為遂行に引

きずられた形で「トオス」の意志形があらわれている点が注記される。

ここで田中（2016）で考察した「-ヌク」と比較すれば、「-ヌク」が結果を重視しているのに対し、「-トオス」はその行為の過程を重視しているといえよう。一貫性からみれば（15a）はやや無理があるようである。

(15) a. 彼は最初から最後まで不正をごまかし通した。

b. ?彼は最初から最後まで不正をごまかし抜いた。

「-トオス」はこれまでの考察した一連の用例、「一晩中、泣き通した」「50キロを歩き通した」などからも明らかのように、終始一貫した姿勢、行為続行の執拗な側面を内面からの視点で表しており、一方の「-ヌク」は外部からの視点に依拠し「やっと」「なんとか」「最後まで」などの副詞を伴うことから、「最後まで戦い抜く」のように多くの障害を配しながら遂行する過程での努力を含意する³⁾。

3. 「-ツクス」の意味と機能

最後まで当該行為を遂行する意味が比較的強い「ツクス」という動詞には、「全力を尽くす」「死力を尽くす」のような定型的な連語としての用法がある。「夫妻に尽くす、国家に尽くす、社会に尽くす」「手を尽くす、手段を尽くす、言葉を尽くす、悪事の限りを尽くす、意を尽くす」などの二格、ヲ格の連語に明らかのように、要するに持てる「力」の費消である。これらのなかには「筆舌に尽くし難い」のような言い回しもある。

「-ツクス」には一般に次のような用例が思い浮かぶ⁴⁾。

(16) a. 言いたいことはすべて言い尽した。

b. 意見が出尽くしたようなので、この辺りで決をとります。

c. この町のことは知り尽くしている。

d. その小説は一ヶ月で一万部を売り尽くした。

e. 彼女のことはいくら褒めても褒め尽くせない、褒め足りない。

f. これは考え尽したすえの結論である。

g. 私はさんざん道楽をし尽くした。

これらの出現背景には書き手、話し手のどのような心情が考えられるのだろうか。実際の用例を見ながら検討してみたい。

(17) もし〈六公四民〉がそのまま現実だったとしたら、八割近い農民が四割の米で生活し、残りの二割強の武士町人が六割の米を喰い尽くしたことになる。 (『百言百話』)

(18) 本文中にも書いたが、そののち精神科医として活躍されるとともに、西洋・東洋のいろいろな精神療法・思想から民間療法に至るまで研究をし尽くした。 (『心の危機管理術』)

(19) 「バックハウスとベーム」とレイコさんは言った。「昔はこのレコードをすりきれるくらい聴いたわ。本当にすりきれちゃったのよ。隅から隅まで聴いたの。なめつくすようにね」 (村上春樹『ノルウェイの森』)

(20) 彼らの汗ばんだ皮膚と荒あらしい体臭が一つの季節のように谷あいをおおいつくす。 (大江健三郎『飼育』)

(21) ……ただ、空腹は、意欲を喪失させる……精神の集中にもよろしくない。とは言うものの、現状を拒否するつもりなら、当然食事もふくめて、徹底的に拒否しつくすべきではないだろうか？ (『砂の女』)

(22) 天地は測り知ることができない。どうして人間の小さな知恵できわめつくすことができようか。しかるにここに西洋の人が八万里の彼方からやって来た。 (『マッテオ・リッチ伝』)

「立ち尽くす」はほぼ一語的成分となったもので、啞然として、或いは呆然自失のさまで佇む様子を表す。

(23) 無駄だとわかっていながらも、手を挙げてもう家に戻るようと合図してから、県道を渡って見ると、やはり母親はまだ立ち尽くしている。 (佐伯一麦『還れぬ家』)

以上の主観的表現の他に客観的描写にも表れる。次は自然災害に用いられた例である。

- (24) いま東京が関東大震災と同じ規模の大地震に襲われたらどうなるだろうか。東京都防災会議、東京消防庁によると、倒壊家屋二万戸、圧死者二千人、地震が発生してから5時間後に品川区、中野区の面積に匹敵する16平方メートルを焼き尽くし、焼死者実に56万人という恐れるべき被害が予想されている。木造住宅が密集している墨田区、葛飾区、江戸川区、江東区といった下町の場合、五時間でその8割を焼き尽くすと推定されている。

（田中角栄『日本改造列島論』）

否定形では「-ツクセナイ」のように不可能動詞形が用いられる。

- (25) さらに部落の仕打ちのことを考えに入れば、おれがうけた被害は、とうてい計算しつくせないほどになる。（『砂の女』）
- (26) ここには書ききれないほどの経験を積んだ3週間の旅。何物にも代えがたい3週間だ。「楽しかった」の一言では語り尽くせない「楽しさ」があった。両親は、自分たちが一切手を貸さずにひとりで海外へ行ってきたことに驚き感心すると同時に、うれしさもあったようだ。（『五体不満足』）

とくに「語り尽くせない」「言い尽せない」は定型的な複合動詞として頻用される。「話し足りない」「食べ足りない」のような不満足をあらわす「-タリナイ」にも隣接した特徴がうかがえる。

4. 「-ハタス」の意味と機能

動詞「ハタス」は、これも連語として「公約を果たす、義務を果たす、役割を果たす」のように、職務、責任、任務、雪辱、復讐、願望、使命、目標、目的、優勝などの名詞とともに用いられる。「すっかり～してしまう」の意味をあらわす。複合動詞としては前項動詞はほぼ「使う」「疲れる」「弱る」に限定されるようである。とくに「疲れ果てる」の使用頻度が高い。

- (27) さまざまな苦勞を重ねながら、生活の資を得るために、腕に職を覚える毎日に精力を使い果たしていた清張は、…

(『一人っ子の上手な育て方』)

- (28) 待ち合わせ場所に使われている、二階のステンドグラスの前に少し遅れてやってきた妻は、いかにも疲れ果てたような表情をしていた。
(『還れぬ家』)

- (29) 疲れ果てた私は、或る瞬間には、柏木がわざわざ私の吃りをからかうために、こういう苦行を強いるのではないかと疑ったりした。

(『金閣寺』)

- (30) 1日中、子守で疲れ果てた母にとっては、ノイローゼになりかねないほどだったというから、その激しさが分かる。(『五体不満足』)

ただ、「ハタス」と「ハテル」には使用制限があって、「使い果てる」は非用であり、また「疲れ果たす」も非用である。これは前項動詞が「使う」のように他動詞であれば「ハタス」のように他動詞が用いられ、「疲れる」のような自動詞であれば、「ハテル」のように自動詞が用いられる傾向を示す。しかし、この「法則」が一般的な傾向であるかどうかは多くのデータから分析しなければならない。

また、語の結合性の面からいえば、「弱り果てる」なども「ハテル」のイメージが「弱る」と合体したもので、一種の強調効果を有する。ここで「切る」と比較するならば、たとえば「疲れ切る」ではいくぶん表層的、表面的で、一時的な状況がうかがわれ、「疲れ果てる」では「疲れた」状態がより深刻で、「芯から」という切実さがうかがわれる。また、「使い切る」は「予定していた金額や体力を残らず使う」ことを意味し、「使い果たす」はその場の金銭や体力の外に、従来あったものまで総体的に使ってしまう結末に重点が置かれている。これは「キル」が瞬間的なイメージがあり、一方の「ハタス」には時間をかけてじっくり、といういわば時間量の差異から生じた特徴と考えられる。

(31)のように「尽き果てる」は慣用的なフレーズとして用いられる。

- (31) 「愛想もコソも尽き果てた」「精魂尽き果てた／精も魂も尽き果てた」

一方、「見果てぬ夢」のように用いられる「果てる」は「いつ果てるともしれぬ航海」（『金閣寺』）のような定型句的な用法もある。

以上、「果たす」については名詞との連語構成を主務とし、複合動詞としての用法は語彙的に狭いことを観察した。

5. 「-アゲル」の意味と機能

複合動詞「-アゲル」は多様な意味を内包し、これまでもしばしば議論されてきた。これは動詞「あげる」の本来の多義的な用法が残存しているからで、上向き、上昇、拡散の方向性をあらわす用法にみられる。すなわち「子どもを抱きあげる」、「金切り声を張り上げる」、「車輪を路肩に乗り上げる」、「荷物を持ち上げる」「取り上げる」「運び上げる」また、「引き上げる」「見上げる」「話をでっちあげる」「仕事を切り上げる」など、ほぼ一語成分となったものも少なくない。

一方、「吹き上げる」と「炊き上げる」のような「-アゲル」には一時的な始動の意味と終結・達成の意味が見られるのも特徴的である。これまで見てきた複数の複合動詞との比較も視野におきながら、以下、実際の用例をみていこう。

(32) 康子は製陶会社社長の娘という地位をもち、父から受け継ぐべき資産が約束されている。彼女自身は特に数えあげるべき価値もない普通の娘だ。 (『青春の蹉跎』)

(33) 同じ自我にめざめ、苦悩する青春を描きながら、「舞姫」はむしろ支配階級知識人の精神的な悲劇を、抒情的詠嘆的にうたいあげることによって美化したものであり、 (『近代作家入門』)

(34)のように「他に分かるようにはっきりと言葉で示す」意味も「あげる」の特徴をあらわす要素である。「共同宣言として不戦平和が詠いあげられる」などもそうである。

(34) 私はポケットからかじかんだ手で、こうした場合に読みあげる英文の説明書を取り出した。 (『金閣寺』)

なお、「読み上げる」には文脈上の二面性があり、時間量の副詞を添えつつ「一晩で一冊を読み上げる」のように達成を意図して用いられることもある。一般には「書きあげる」「勤め上げる」「編み上げる」「まとめあげる」「育て上げる」「しあげる」のようにある種の満足感を込めた結果が顕著であるが、予定期限までに間に合わせるといった意味もある。

- (35) 直子はあなたに返事を書こうとずっと悪戦苦闘していたのだが、どうしても書きあげることができなかった。 (『ノルウェイの森』)
- (36) それでも私は馬車馬のように正面ばかり見て、論文に鞭たれた。私はついに四月下旬が来て、やっと予定通りのものを書き上げるまで、先生の敷居を跨がなかった。 (『ころ』)
- (37) 妻の奉仕は裏切られ、妻の献身的な自我は対象を失った。そのむなしさの中で、今から後は子供を無事に育てあげること以外には、自分の人生は無いものと感じた。 (『青春の蹉跎』)
- (38) ……そうした間接的な知識でも、彼がここにたどりついた最初の日の、あのおぼろげな記憶と重ね合わせてみれば、おおよその地図はつくりあげることが出来た。 (『砂の女』)
- (39) 農村から都市へ、高い所得と便利な暮らしを求める人びとの流れは、今日の近代文明を築きあげる原動力となってきた。 (『日本列島改造論』)

一方、自動詞の複合動詞「アガル」は、上昇の方向性を加味する意味を内包し、「飛びあがる」「駆け上がる」「湧き上がる」「舞い上がる」「(騒ぎが)もちあがる」「椅子から立ち上がる」「浮き上がる」、「(人口が)膨れ上がる」、「燃え上がる」、「話が盛り上がる」、「起き上がる」、「跳ね上がる」のように用いられるが、自他双方に用いられるものとそうでないものがある⁵⁾。

- (40) a. 論文を書き上げる ⇒ 論文が書き上がる
 b. 松茸ご飯を炊き上げる ⇔ 松茸ご飯が炊き上がる

「炊く」、「焼く」といった動詞に「あがる」が後接する例がある。ただ、次のように使用上の制限はいくぶん残るようである。

(41) a. じっくり炊きあがった五目飯に生卵をぶっかけて食う。
(>炊きあげる)

b. こんがりと焼き上がったグラタンにチーズを添える。
(=焼き上げる)

また、「-アゲル」には「十分に」「しっかりと」などの意味も比較的顕著にみとめられる。

- (42) a. 徹底的に調べ上げたので、どんな質問をされても怖くない。
b. 助手から指導教授に叩きあげられたので、芯が強い。
c. 「山が崩れて海が干上がるくらい可愛い」(『ノルウェイの森』)
d. 晴れ上がった10月の空にブルーインパルスが五輪を描いた。

以下の用例でも「きれいに」「すっきり」などの副詞が内在している。

(43) 六十歳くらいの背の高い額が禿げあがった男だった。
(『ノルウェイの森』)

(44) 螢はボルトのまわりをよろめきながら一周したり、かさぶたのようににめくれあがったペンキに足をかけたりしていた。(『砂の女』)

(45) 彼はそういう思い上がった気持だった。登美子と結婚したら自分が大きな損をしなくてはならない。(『青春の蹉跎』)

上例(45)「思い上がる」はほぼ一語化した性格描写だが、〈徹底〉、〈周到〉の意味が内在している。

「勤めあげる」もまたほぼ一語化したもので、職務を果たし任期を終えるという意味で用いられるが、定年まで大過なく同じ場所でしっかりと働く、といった要素が含意されている。たとえば、さまざまな苦難があっても屈せず自らの信念に基づいて、という姿勢が読み取れる。「無事に」「無難に」「特に大きな不都合もなく」「大過なく」「問題なく」「順調に」「波風立てずに」などの副詞的意味が介在する。次の用例は「同じ会社で定年まで勤め上げる」ことは、ただの自己満足です」と題する文章にあらわれた例で、「勤めあげる」がひとつのキーワードになっているケースで、「-アゲル」の意味がよく表されている。

- (46) 先日、ある大手外資系企業のエグゼクティブとお話していたら、リストラの話になり、「特に年配の方をリストラする時に、『あと数年なので、最後まで勤め上げさせて欲しい』とか言われるんだけど、その気持ちがよくわからないんだよ」とおっしゃってました。要は、その残り数年分の給与に相当するパッケージ（割増金）を払うので、働いても働かなくてももらう報酬は一緒なのに、なぜ働きたいんだろう、という疑問でした。彼はこれを「価値観の違い」という観点で片付けてました。「ひとつの会社で定年まで勤め上げる」ということが、日本では「美德」になっていることが、外資系で育ってきた彼には理解できない、ということでした。「同じ会社で定年まで勤め上げる」ことは、個人の価値観に関係なく、今の時代には、もう「美德」でも何でもなく、ただの自己満足です。（略）変革を起こしたいと思っている会社にとって、このような要素を持たない、同じ会社一筋で「定年まで勤め上げたい」と考えているようなベテラン社員は、変革を阻害する要因、または高コストの要因でしかありません。（略）個人にとっても、「同じ会社に定年まで勤め上げる」ことを目指すのは、良いことではありません。まず、同じ会社にあんまり長く勤めると、新しい職が探しにくくなります。（略）また、同じ会社で勤め上げるということは、人脈や知識も、同じ会社の一定分野に限定されるということです。これは定年後に第二の人生を歩むことを想定すると、他の経験をしている人よりも、その幅や可能性が限定されます。（略）もちろん、転職はリスクです。ただ、「同じ会社で定年まで勤め上げる」ことを目指すよりは、「経験値」が上がって強いプレイヤーになれる分だけ、長い目で見れば、リスクは低いのではないのでしょうか？

http://www.huffingtonpost.jp/hikaru-adachi/retirement-age_b_5971786.html

（最終アクセス 2016年9月15日）

6. その他の終結をあらわす複合動詞後項成分

以上、田中（2016）の「キル」「ヌク」に次いで、「トオス」「ツクス」「ハタス」「アゲル」の意味についてみてきた。本節ではこれら以外の複合動詞後項動詞について瞥見する。

6.1 「-ヤム」の意味

一般的に行為事象の中止・中断をあらわす「ヤム」は「オウル」と似て非なる意味を持つ。しばしば外国人の日本語非用例に「雨が降り終わる」というのがあるが、母語に置き換えた結果の慣例で、誤用とはいいがたい。

(47) 僕は長いあいだそのままの姿勢で直子が泣きやむのを待った。しかし彼女は泣きやまなかった。 (『ノルウェイの森』)

(48) やっと、飲みやんで、言いわけがましく女の口におしこんでやる。 (『砂の女』)

(49) 僕らの古代めいた水浴の日の夕暮、夕立が激しく谷間を霧の中へとじこめ、夜がふけても降りやまなかった。 (『飼育』)

「-オオセル（遂せる／果せる）」もまた動詞の連用形に後接して、「完全に…する」という意味をあらわす。ただし、動詞は「逃げる」しか見当たらなかった。

(50) 犯人は嚴重な捜査網をくぐりぬけ、まんまと逃げおおせた。

6.2 「-トゲル」の意味

動詞「トゲル」は、「望みを遂げる」のように、目的、思い、心中、本望、願い、志などが意味的な対象となるほか、「急成長、進歩、欲望、最期」といった名詞とともに連語を構成する。しかし、「しとげる」「やりとげる」をのぞいて他の動詞には後接しがたい。

(51) 待ってさえいれば、隙をうかがっていた火が必ず蜂起して、火と火は手を携え、仕遂げるべきことを仕遂げた。 (『金閣寺』)

(52) 「私は私の役目をなし遂げる事に全力を尽すだろう。(略) お前たち

は私の斃れた所から新しく歩み出さねばならないのだ。

(『近代作家入門』)

(53) 実際、日本人がめざましい近代化をやりとげることができた一因は、この「タテ」につながるXの構造を百パーセント生かして使った、ということに求められよう。(『タテ社会の人間関係』)

(54) ほんの一例であって、障害を持った人間しか持っていないものというのが必ずあるはずだ。そして、ボクは、そのことを成し遂げていくために、このような身体に生まれたのではないかと考えるようになった。(『五体不満足』)

ここで形式動詞「スル」「ヤル」「ナス」に後接する終結複合動詞を比較すると、以下のような分布をなす。○は正用、△はやや不自然、×は非用とみなす。

表1 行為動詞「スル」「ヤル」「ナス」と複合動詞

	スル	ヤル	ナス
通す (他)	△ し通す	○ やり通す	× なし通す
尽くす (他)	○ し尽くす	○ やり尽くす	× なし尽くす
果たす (他)・ 果てる (自)	× し果たす × し果てる	× やり果たす × やり果てる	× なし果たす × なし果てる
あげる (他)・ あがる (自)	○ しあげる ○ しあがる	× やりあげる × やりあがる	× なしあげる × なしあがる
遂げる (他)	○ し遂げる	○ やり遂げる	○ なし遂げる
ぬく (他)	× し抜く	○ やり抜く	× なし抜く
きる (他)	× し切る	○ やり切る	△ なし切る

6.3 「-ハラウ」の意味

このほか、「ハラウ」も特定の動詞に後接し、徹底した完遂を目指す意味をあらわす。出現頻度の高いものとしては、(55)のような動詞が前項動詞となる。

- (55) 追い払う（追っ払う）、出払う、焼き払う、取り払う（取っ払う）、
かっぱらう、売り払う、引き払う、逃げ払う、振り払う、支払う、
- (56) 工場が移転先の用地を入手して建物をつくり、設備を入れて、現有
工場を売りはらうまで二、三年はかかる。（『日本列島改造論』）
- (57) 星がけむっているということは、つまり風に、空中の水蒸気を吹き
はらうだけの力がないということだろう。（『砂の女』）
- (58) 里子は、落ちつきはらって本堂の方へ歩いてゆく慈念をありがたい
とふと思った。（『雁の寺』）
- (59) いつもの通り沈黙がちに落付き払った歩調をすまして運んで行くの
で、私は少し業腹になった。（『こころ』）
- (60) まるで大人たちが山や谷へ出はらっている昼間、黒人兵を監視する
のが僕らに委ねられた守るべき職務でもあるように平然として、
（『飼育』）
- (61) 国分寺のアーバーを引き払った後、私は神戸の家に戻ってしばらく病
院に通いました。（『ノルウェイの森』）
- (62) 「ふふ、心配するな。誰もくれっていやしねえ。今夜、あそこから
搔っ払って来てやらあ」（『野火』）

特殊な例としては(63)「取りはらう」があった。

- (63) シカゴでは郵便局の建物の真中をハイウェイがぶち抜いている。木造
建築なら取り払って道路をつくることもできるが、高層ビルではそ
う簡単にはいかない。（『日本列島改造論』）

なお、「支払う」「酔っぱらう」などはもはや一語成分となったものだが、〈徹底〉、〈完遂〉の意味は強く認められる。

6.4 「トドケル」の意味

「トドケル」は「見届ける」のほか、「送り届ける」がほとんどであった。

- (64) 慈念は、書院の和尚たちに茶を出していたが、本堂へきて出棺の用
意ができたのを見届けると、また、和尚連を導いた。（『雁の寺』）

- (65) 彼はすぐさま鹿苑寺へ電話をかけて、私の申立にいつわりのないことを確かめ、これから附添って寺へ送り届けると告げた。

(『金閣寺』)

- (66) 玉枝が物をいったことが嬉しかったのと、力をふりしぼって何かをいおうとする声を聞きとどけてやりたい一心になった。

(『越前竹人形』)

6.5 「ワタル」「ワタス」の意味

「ワタル」は隅々まで浸透する様子で、「一面に、広く…する」などの意味をあらわす。「鳴り渡る」「行き渡る」「冴えわたる」「澄みわたる」「知れ渡る」「響きわたる」「轟きわたる雄叫び」「沁み渡る」「照り渡る」などが頻用される。

- (67) 台風が去って、晴れ渡った空にさわやかな風が吹いた。

- (68) 石段の下では火事が人家にかくれて焰の頭しか見えないところへ、擦半鐘が鳴り渡るので、なお不安が増して走った。(『雪国』)

- (69) 方丈にひびきわたるその槌音が、私に又もや、老師の持っている権力のあらたかさを思い知らせた。(『金閣寺』)

- (70) 深々と、ゆっくり、胸いっぱい吸いこむと、落葉の香りが、血管の隅々にまでしみわたった。(『砂の女』)

一方、「ワタス」は「見渡す」がほとんどで、「見渡す限り」は副詞句となったものである。

- (71) やっと東練兵場の角へ出た。まるで見渡す限りの避難者の群で、広い練兵場は人波で埋め尽されていた。(『黒い雨』)

- (72) 君の仕事は、今日の昼の間に、死体を整理しておいて、焼却場のトラックに引渡す事だろう？(『死者の奢り』)

「引渡す」は「犯人を警察に引き渡す」のように、〈移動・授受〉の関係をあらわしながらも、やはり〈徹底〉の意味が内在していると言えよう。

6.6 「アカス」の意味

動詞「アカス（明かす）」も動詞本来の解明の意味のほか、納得のいくまで、といった完遂の気持ちをにじませている。これも特定の動詞にしか見られない。「飲み明かす」「踊り明かす」は「夜が明ける／夜を明かす」の連想から、「朝まで」ぶっ続けに、ぶっ通しで行為に夢中になる、集中するといった意味をあらわす。

(73) こんな笑いを説き明かすことはできない。笑いは外部から来て、突然私の口もとに貼りついたかのようなようだった。 (『金閣寺』)

(74) 里子は久しぶりに呑んだ。ひどく廻りが早かった。夜になった。よく南嶽も入れて、三人で呑みあかしたこともあるから、里子は落ちつけた。 (『雁の寺』)

「一晩中、泣き明かす」も涙が涸れるまで、「人生について語り明かす」もさかんに議論するという主体の心情や意志をあらわす。

6.7 「サル」の意味

「サル」は方向動詞のひとつで、「～テシマウ」の意味をあらわす。「走り去る」「駆け去る」「逃げ去る」「立ち去る」「流れ去る」「過ぎ去る」「飛び去る」のように純粹に消滅への方角を表すと同時に、「拭い去る」「取り去る」「除き去る」「敗れ去る」「奪い去る」「消え去る」のように消去、除去、排除の意味をあらわす。「すっかり」「完全に」「たちまち」などの副詞をとともなうこともある。

(75) 忠平は十年余の歳月が音を立てて消え去る気がした。 (『越前竹人形』)

(76) 死は僕という存在の中に本来的に既に含まれているのだし、その事実はどれだけ努力しても忘れ去ることのできるものではないのだ。 (『ノルウェイの森』)

(77) 僕は義理という気持を完全に棄て去ることはできませんよ。もちろん伯父さんに対してね。 (『青春の蹉跌』)

- (78) 金閣はそれらをきれいに喪い、実質を忽ち洗い去って、ふしぎに空虚な形をそこに築いていた。 (『金閣寺』)
- (79) 天守閣は天守台を離れ去って、一町ばかり向うの濠の端に行って崩れていた。 (『黒い雨』)
- (80) 結局夜が明けて日の光が部屋の隅々にしみこんだ青白い月光のしみをすっかり溶かし去ってしまうまで眠りは訪れなかった。 (『ノルウェイの森』)
- (81) そのために今日まで積み重ねてきた努力も、野心も、自負も、希望も、ことごとく崩れ去って跡形もなかった。残るものはただ屈辱と暗黒の未来ばかりだった。 (『青春の蹉跎』)

6.8 「-スマス」の意味

「スマス」は本動詞の「よけいなことを考えないで、その事一つに注意・意識を集中する」という意味を残存させながら、動詞の連用形について、「一つのこと心に集中させてその行為を遂行する」、「完全に行為を遂行する」と言った意味をあらわす。「研ぎ澄まされた感性」のように定型句として用いられる。今回、実例を収集できなかったが、一般に使用度出現度は低いと思われる。

6.9 漢語複合動詞「-破 (スル)」「完- (スル)」

漢語複合動詞として、後綴の「破」も強調の意味を添えながら、意味上、完遂、達成をあらわす側面がみとめられる。「みごとに」「あざやかに」「一気に」「やすやすと」といった達成感をあらわす。(82)はその主要例である。

- (82) 撃破する、描破する、読破する、喝破する、走破する、踏破する、翔破する、看破する、突破する、打破する、論破する、……
- (83) 四迷は高度の語学力を駆使して、すでに多くのロシア文学を読破し、近代文学の真髄にふれていた。 (『近代作家入門』)

また、前綴「完-」は文字通り、「完全にやり終えること」をあらわす。(84)

はその主要語である。

- (84) 完食する、完売する、完走する、完勝する、完敗する、完済する、完備する、完結する、完遂する、完読する、……

7. 終結、完遂をあらわす副詞成分について

終結、完遂にかかわる共起成分として、いくつかの副詞に注目してみたい⁶⁾。一般に完遂、達成をあらわすものには程度を含意しながら、主体、あるいは書き手、話し手の心的な感情がみとめられる。これらには「すっかり」「完全に」「完璧に」「きれいに」「みごとに」「やすやすと」「まんべんなく」「あますところなく」「完膚なきまでに」「納得のいくまで」「ことごとく」「とことん」「最後まで」「徹底して」「徹底的に」「徹頭徹尾」などのほか、「なんとか」「どうにか」「からくも」などのほか「やっと」「ようやく」「とうとう」「ついに」などがその主要なものである。以下、実際の用例で見てみよう。

- (85) 雨で洗われた露と砂利には血がなかった。しかし、慈念はきれいに掃き清めた。 (『雁の寺』)
- (86) 住職は小肥りしていて、もちろん皺もあったが、一つ一つの皺の中までが、きれいに洗い込まれている。 (『金閣寺』)
- (87) ……他人を、黒板の上のチョークの跡のように、きれいに拭い去ってしまえると信じ込んでいる世界…… (『砂の女』)
- (88) 頭はみごとにはげ上がり、大きな顔からは一面に汗を吹き出している。この店の主人らしかった。 (『あした来る人』)
- (89) 彼がみずから描いた未来の人生構図も、そのために今日まで積み重ねてきた努力も、野心も、自負も、希望も、ことごとく崩れ去って跡形もなかった。 (『青春の蹉跎』)
- (90) つい半年ばかりまえの、ある嵐の夜、西の外れの穴で、ついに防ぎきれずに、家が半分埋まってしまったことがあるという。 (『砂の女』)
- (91) 十かぞえたら、飛び出そう……しかし、十三まで数えても、まだ思

いきれず、それからさらに四呼吸も重ねて、やっとふみきっていた。
 (『砂の女』)

(92) 賭けこそ人間をとことんまで鍛え上げ苦しめるのだが、賭けを恐れる人間に栄光と生き甲斐は恐らく訪れぬであろう。(『百言百話』)

(93) なにかに熱中すると、それ以外のことにはまるで無頓着になってしまい、とことん考えぬく、群をぬく集中力と、人並みはずれた探究心のために退学したエジソン。(『一人っ子の上手な育て方』)

8. おわりに

本稿では終結、達成にまつわる複合動詞の後項動詞のうち、「トオス」「ツクス」「ハタス」などの意味と用法について若干の記述を行った。このほか「飲みほす」のように特定の動詞につく「-ホス」のような成分もある。ここで田中(2016)の考察とあわせ始動、開始をあらわす複合動詞を比較対照させてみたい⁷⁾。

表2 動作行為、事象の始動相と終結相

【始動、開始】の意味素	【終結、完遂、達成】の意味素
～ヨウトスル	～テシマウ
-ハジメル	-オワル
-カケル、-ダス	1) -キル、-ヌク
	2) -トオス、-トゲル、-ツクス、-ハタス、 -アゲル
	3) -トドケル、-サル、-ワタル、……

「キル」「ヌク」などとともに、日本語にはこのような終結、達成にまつわる後項動詞が発達している背景ないし要因としてどのようなことが考えられるだろうか。

ひとつは、日本語の思考発想形式の主要な特徴として、結果指向への傾斜

が考えられるだろう。過程よりもむしろ結果到達の時点における心的態様への関心は、他の「ヨウニナル」「コトニナル」などのナル的な表現形式、「可能性も捨てきれない」のように、定型句とはいえ、可能表現との相関の事例でも明らかである。

また、これらの行為の心的姿勢をささえる因子として、「なんとか」「最後まで」など、達成にまつわる副詞の分布にも注目する必要があるだろう。

(94) a. 周囲の協力で、なんとか困難を切り抜けることが出来た。

b. 苦しい戦いでしたが、最後まで力を出し切りました。

主体や対象によっても前項動詞を共有しつつも微妙なニュアンスが生じる。

(95) a. 注意が（すみずみまで）行き届く。

b. 経営方針が（末端まで）行き渡る。

(96) a. 歯茎にしみとおる。（痛さの強調）

b. 世間にしみわたる。（浸透の徹底）

さらには、「希望が、ゆきわたる国へ」（〇〇党 2016）のように、コピーにもしばしば用いられるように、擬人的発想の要素をも担っていることは興味深い。

心的感情という面から田中（2016）で取り上げた「-キル」の意味機能をさらに補完するならば、書き手、話し手のある種の決断、覚悟（自己発見、救済）も内省的な状況描写として際立っている。

(97) 「人間は生き、人間は墮ちる。そのこと以外の中に人間を救う便利な近道はない。……墮ちる道を墮ちきることによって、自分自身を発見し、救わなければならない。（坂口安吾『墮落論』）

辞書の中には複合動詞の用例の扱いにおいて不十分な箇所も少なくない⁸⁾。このように、複合動詞の各用法の微妙な語性、感覚は日本語を学ぶ学習者にはなかなか理解しづらいところである。本稿では対照研究からの視点については触れることが出来なかった。言語学的視野から教学への視野を見通した研究、とりわけ認知言語学的な意味考察と同時に、対照研究からのアプローチが必要であろう。

〔備考〕本稿は複合動詞の記述的研究をめざすもので、在外研究期間（2016年度前半期）における研究成果の一部である。査読委員から適切なお指摘をいただき、英文要約の校閲に際してもご教示を受けたことに謝意を表する。

【注】

- 1) 田中（2016）では従来の「達成」「完結」「終了」などの“終結”概念にくわえて、徹底、着地、集中などといった心的観察による視点を補充した。ここで言う心的観察とは書き手の主観と行為主体、事態主体の融合体とみなす。
- 2) 「通す」「尽くす」「果たす」などについても近年では杉村（2011など）の成果が顕著である。一方、コーパスデータの分析のほかにさらに記述的な研究も並行して進められるべきであろう。
- 3) 完遂、達成の複合動詞につきそう副詞については後述する。
- 4) 出典の記載のないものは作例、または辞書記載（『大辞泉』小学館、『新和英大辞典』研究社など）の用例による。
- 5) 複合動詞の自他対応（「書き終わる」「書き終える」、「食べかける」「食べかかる」、「書き上がる」「書き上げる」など）については、本稿では「あがる」「あげる」、「とおす」「とおす」が顕著であるが、事例を指摘するにとどめる。
- 6) 完全性をあらわす副詞と修飾の関係性については宮城（2016）を参照。
- 7) 従来の研究では終結相の複合動詞のいずれを比較するのか定かではないが、トータルにとらえるには、従来の項目以外にも注目する必要がある。
- 8) たとえば、『日中辞典第二版』小学館/北京商務印書館（2002）の「抜く」の項には「彼は奥さんを亡くして弱り抜いている」という例文があるが、これなどは「弱り切っている」のほうが適切であろう。なお、対照研究ではたとえば、タイ語の「終わる」には *sət*, *còp*, *mòt* という動詞に後接する3語の使い分けが顕著であり（田中「動詞構文をめぐる日タイ語対照研究」2004, pp.41-75）、それらの視点も本考察の有効な手がかりとなるが、紙面の都合から別稿にゆずる。

【参考文献】

小俣佳吾（2007）「複合動詞「～きる」「～ぬく」「～とおす」について」、『外国語学

会誌』37, 大東文化大学外国語学会

何志明（2010）『現代日本語における複合動詞の組み合わせ—日本語教育の観点から—』、笠間書院

杉村泰（2010）「コーパスを利用した複合動詞“V1 - 果たす”の意味分析」、『言語文化論集』12-1 pp.61-79 名古屋大学大学院国際言語文化研究科

杉村泰（2011）「コーパスを利用した複合動詞“V - 尽くす”の意味分析」、『言語文化論集』32-1 pp.83-95 同上

杉村泰（2012）「コーパスを利用した複合動詞“V - 通す”の意味分析—「通す」と「通る」の意味と使い方における比較—」、『言語文化論集』33-1 pp.47-59 同上

田中寛（2004）『統語構造を中心とした日本語とタイ語の対照研究』、ひつじ書房

田中寛（2016）「完遂、徹底、着地をあらわす複合動詞の一考察—「-キル」「-ヌク」を中心に—」、『語学教育研究論叢』33, 大東文化大学語学教育研究所

中島紀子（2006）「複合動詞に関する一考察—「～きる」「～とおす」「～ぬく」の比較から—」、『国文学考査』18, 大正大学国文学会

姫野昌子（1980）「複合動詞「～きる」と「～ぬく」「～とおす」」、『日本語学校論集』7、東京外国語大学外国語学部附属日本語学校

姫野昌子（1998）『複合動詞の意味と構造』、ひつじ書房

彭広陸「複合動詞における後項動詞の意味指向をめぐって」、『北研学刊特集号：日本語の複合動詞』第5号、広島大学北京研究中心、白帝社

宮城信（2016）「完全性を表す表現と副詞的修飾関係」、『日本語文法』16-1 3-19 くらしお出版

百留康晴「複合動詞後項「-渡る」の通時的研究—文法化の観点から—」、『北研学刊特集号：日本語の複合動詞』第5号、広島大学北京研究中心、白帝社

廖紋淑（2009）「複合動詞「～終わる」「～切る」「～尽くす」の使い分けに関する覚え書き—日本語母語話者と日本語学習者の比較—」、『言語と文化』10、名古屋大学大学院国際言語文化研究科

【用例出典】北京日本学センター編日中対訳コーパス（2003）、朝日新聞、その他